

尖閣諸島における 中国漁船衝突事件

——二つのコメント



拓殖大学学長 わたなべ としあき
渡辺利夫

尖閣諸島で中国漁船衝突事件が起こり

て一ヵ月半が過ぎた。事件直後からの中国政府の行動はまことに迅速かつ強硬なものであった。非礼などというレベルを超えたほとんど恫喝的な振る舞いであり、最後にはこの事件についての全責任は日本政府にありとして、何と謝罪と賠償を要求するにいたった。一ヵ月半の間に生じた両国外交関係を眺めていて、二つのコメントが私の頭をよぎる。

強い者に巻かれた？

一つは、こうである。衝突事件の後、中国漁船の拿捕、船長の逮捕とその身柄勾留期間延長などの然るべき行動は取ったものの、中国政府による執拗で強圧的な抗議に身を屈して、那覇地検が船長を処分保留のまま釈放するという実に慚愧に堪えない対応をしてしまった。この事実は、日本という国はその主権を侵犯されても、「強い者には巻かれる」というがごとく、結局のところは強者のいいなりになる国だとういう「学習」を中国にさせてしまったことを意味する。領海侵入の頻度は、今後、一段と高まりをみせ、これに抗する日本の力の衰弱は歴然たるものとなるろう。西沙・南沙諸島で領海を侵されて苦窮に陥っているベトナム、フィリピン、インドネシアなどの日本政府に対する失望と不信はいや増しているに違いない。

遅れてきた帝国主義国家

二つは、それにもかかわらず、中国政府の行動は、それがいかに強圧的なものであったにせよ、これを「理不尽」なものと捉えてはならない、というコメントである。勃興する大国のナショナリズムが暴力的な対外膨張の様相を呈することは、欧米や日本の歴史を顧みれば、時空を超えて大いにありうることなのである。帝国主義の時代とは、同時にナショナリズム昂揚の時代でもあった。日本もアメリカもドイツもフランスも、強いナショナリズムを背後に他国の領土に侵入してこれを支配下においたという歴史をもつ。中国とは、「遅れてやってきた」帝国主義国家なのである。

いくら言葉を重ねて中国を難じてみたところで、中国がみずからの非を認めるはずはない。問われるべきは、現代の中国が内に抱えもつナショナリズムの情念に気づくこともなく、ただ中国を刺激するな、穏便にことをすませよ、というところか頭に浮かばない日本の政権中枢部の外交感覚の麻痺なのである。こんな感覚麻痺をついつけるのであれば、中国に抗することができなくなるのはもはやこの隣国とは共存するどころか難くないのではないか。